【小説部門・奨励賞】

星の花

神戸女学院高等学部　第２学年　岡元　更紗

　朝早く、僕は祖母の家の玄関を出た。人通りの少ない道をゆっくりと歩きながら小道を抜け、目の前に圧倒されるような山を臨む。町のすぐ傍にあるその森は、やはり何度見ても神聖で妖しい、異様な雰囲気を醸し出している。その上には澄んだ青に白い雲が浮かんだ、如何にもといった夏の空があった。まるであの日と変わらぬように。

　数年前、まだ僕が十歳になったばかりのこと、僕は学校でいじめられていた。毎日が孤独で、居場所なんてどこにもなかった。そんな年の夏の終わりに僕は遠くの祖母の家に泊まりに行った。家は大きな森の麓にあって、その森には神社があった。僕は来て一夜明けた朝にその神社へと向かった。昔から何度も来ているが、いつも居心地の良いような、気味の悪いような、異様な空気を感じていた。暫く登って神社へとたどり着く。今は朝ということもあって人はいない。僕は本堂の前に立ち、お賽銭を投げ入れて祈った。

「神様、いい子にしますから、もういじめられないようにして下さい。」

　その時、どこからか声が聞こえた。

『こっちだよ。』

　声がした方を見ても誰もいない。その代わりに、さっきまではなかったはずの道が出来ていた。僕は怪しいと思いながらも好奇心に負けて道を進んでいった。しばらくして開けたところに来ると、そこはまるで桃源郷だった。夏なのに桜が咲き乱れ、あらゆる果実が季節を無視してなっていた。その光景に見惚れていると、後ろから声を掛けられた。

「君、だぁれ？」

　僕がドキッとして振り返ると、そこには少女がいた。

「ここに来客なんて珍しいね。君は何を求めてここまで来たの？」

「僕はおばあちゃんの家に泊まりに来てるんだ。君は麓の町に住んでる子？」

「麓？いや、私はあそこから来たんだ。」

　そう言って少女は上を指す。その指の先には青い月があった。

「月？君は月から来たの？なんだか僕の知っている月とは違うみたいだけど、あそこには君以外にも誰か住んでるの？」

「それは勿論、沢山の人が住んでるよ。まあ、君がいた世界とはきっとちょっと違うんだろうね。」

　僕は彼女の言っている意味が全く分からなかった。そもそも、人類は既に月に着陸したし、月に誰もいないことは周知の事実のはずだ。それに、僕がいた世界って？

「ここはどこ？僕がいた世界とは違うの？」

「違うと思うよ。ここは名もなき場所だけど、皆が幸せでいられる場所。花は一年中咲いて

るし、果物だって取り放題。だけど、ここにいる人は皆何かを探して彷徨っている。」
「探し物？」
「そう。皆自分たちが住む世界で満たされない思いをしたり、大切なものを失ったりした。ここはそういう人たちの集まる場所。最終的に、それを取り戻したら帰れるんだけど……、君は何を探しているの？」
「僕が失ったもの……、分からないや。おばあちゃん家の近くの神社に行って、お祈りをしたら知らない道が出来てて、そこを通って気づいたらここにいたから。」
「なら、その祈った内容がヒントなんじゃない？」
　僕はじっと考えるも、何故か思い出せない。
「ごめん、全く覚えてないよ。」
「それなら、私が思い出すのを手伝おうか？その代わりに君に手伝って欲しいことがあるんだけど……。」
「僕に出来ることであれば。」
「実は私は失ったものが何か分かってはいるの。でも、もう手に入らないから……、最初はここにずっと住もうって思ってたの。だけど、やっぱり帰ろうって決心したの。」
「あれ、でもどうやって帰るの？」
「それが問題でね、探し物を手に入れた人たちはすぐに帰れるけど、手に入らない人は魔法の花が必要なの。」
「魔法の花？」
「そう、小さな光る花で、なんでも願いを叶えてくれるの。で、それを手に入れる方法が来週、年に一度の星祭りの日にここで思いを星に届けることなの。そこで、私は歌を歌うことにしたんだけど、実は歌うのあんまり上手くなくて……、君にコーチを頼みたいんだけど。」
　歌……、なんだろう、嫌な感じがする。でも、もしかして僕の祈りと関係があるのかな。そう思って僕は彼女の頼みを了承した。
　何日か教えると、彼女はすぐに上達した。彼女が自主練をしたいと言うので、僕はその間にこの世界を見て回ることにした。
　少し離れたところにどこかで見たことがあるような田園風景が広がっていた。そこに川があり、一人の男の人が釣りをしていた。
「こんにちは、この川はよく釣れるんですか？」
「おお、こんにちは、ええそれはもう、よく釣れますよ。ほら、このクーラーボックスを御覧なさい。上等なのがいっぱいでしょう。」
　見ると、鮮やかに光る鱗の魚が何匹もいた。
「私は幻の魚を求めて今まで色んな川を巡って来たんですが、ここほど珍しい魚が沢山採れる所はありませんでしたよ。ここならきっと私の望む魚も手に入るでしょう。そうしたら、妻も娘たちも喜ぶだろうなぁ。」
　僕は魚を一つ分けてもらって川を後にした。あの人は、魚を手に入れたら帰れるのかな？

そう考えながら進んでいくと、小さな家を見つけた。扉をノックしたが、返事はない。恐る恐る中に入り、「こんにちは」と尋ねると、可愛いワンピースに身を包んだ高校生くらいの女の人が出てきた。
「この家にお客さんなんて珍しい。しかも小さなお客さん！」
「僕、ここに来たばかりで色々見て回っているんです。お姉さんは何を探しているんですか？」
「探し物は特にないけど、私は可愛いお洋服が沢山欲しいの。今までいた世界ではいくらバイトしてもちっともお金が貯まらなくて、流行の服が全然買えなかったけど、ここなら私の欲しいものが何でも手に入るの！」
「そうなんですね。じゃあ、いつ帰るんですか？」
「帰りなんてしないわ。だって戻ってもバイト漬けの日々だし、友達はもっと裕福で、苦労しなくても手に入ってててつまらないもの。」
　僕は家を出た後も様々な所を回り、色んな人と話した。その中で、ある少年に出会った。
「こんにちは、君は何を探しているの？」
「何だろう、僕は特に欲しいものはないかな。ただ元いた世界が嫌で、逃げてきただけ。」
「何かあったの？」
「親がすごく厳しくてね、勉強ばかりの毎日だよ。別に受験生って訳でもないのにね。お陰で友達とも疎遠になっちゃって……。」
「それでここに来たんだ？」
「そうかな。家は居心地悪いし、学校でも友達とあまり話さなくなったし、強いて言うなら居場所を求めてたのかな。」
　居場所……、そうか、僕も居場所を求めてここまで来た気がする。学校でいじめられていて、それで……。
　彼女の所に戻るころには日が暮れかかっていた。彼女は丁度歌っているところだった。
「ただいま。」
「あ、おかえり。色んな人たちと話せた？」
「うん、皆それぞれ何か欲しいものをちゃと分かってて、それを話してくれたよ。皆笑顔だったな。でも、なんだか寂しそうだった気もする。」
「ふーん。それで、君は何か手掛かりが掴めた？」
「うん。僕は居場所を求めてたんだと思う。実は学校でいじめられていて。きっかけは些細なことだったと思うけど、確か僕の歌が原因だった。」
「歌？」
「僕は元々歌うのが好きだったんだ。それで、その歌を聴いて周りが笑顔になるのも嬉しかった。それで、いつか歌手になろうって夢を持ってたんだけど……。音楽祭の時、先生が僕を主役に推薦してくれて、それを快く思わなかったクラスメイトから『お前の歌を聴いても不快なだけ』って言われて。それからいじめられるようになったんだ。」

「そうだったんだ。それで、君は元いた世界に戻るの？」
「どうしよう、戻ったって独りぼっちだし……。」
「それなら、一緒に月に行くのはどう？」
「月に？」
「月はいいところだよ。皆が優しくて、助け合っていて、小さな国みたいなものだけど、争いがない平和なところだから、きっと君も気に入ると思う。」
　僕は彼女の話を聞くうちに、月に行くのもいいと思った。そこならきっともう独りぼっちじゃなくなる！
「ところで、君はどうしてそんな素敵な月からここに来たの？前に失ったものを思い出したって言ってたけど。」
「……それはね、私の両親なんだ。」
「え？」
「ここに来る前に突然両親を亡くしちゃって。友達も一緒に悲しんでくれたけど、やっぱり親が居ないのが凄く寂しくて悲しかった。二人とも私のことを沢山愛してくれたから、一緒にいるだけで幸せだったからね。」
「……そっか。」
「でもね、ここでしばらく過ごすうちに、やっぱり帰ろうって思ったの。ここは確かに美しいし、ここで過ごすのは幸せだけど、両親と一緒に暮らした月にはかなわないなって思ってさ。」
　そう言って彼女はニッと笑った。その笑顔を見て僕は迷ってしまった。確かに学校には居場所がないけれど、僕には両親や妹、それに祖母がいる。皆僕の帰りを待ってるんじゃないのかな？
「それで、結局君は月に行く？」
　その質問に僕は「考えておく」とだけ伝えた。
　いよいよ星祭りの日が来た。本番の前、彼女が一人で練習をしたいと言ったので、僕は散歩に行き、頃合いを見計らって戻ってきた。すると、誰かのすすり泣く声が聞こえた。彼女だった。きっと不安なんだ。何かしてあげられないだろうか、そう思った時、昔の事を思い出した。確か小学生になって間もない頃、妹が泣いていた時に励まそうと思って歌を歌ったんだ。そして、その歌を聴いた妹は笑顔になってくれた。僕は彼女のために歌を歌った。
「……、君の歌、とっても綺麗。」
　彼女は笑った。その笑顔を見て僕はもっと大切なことを思い出した。ここで出会った人たちは皆幸せそうに見えたけど、それ以上に寂しそうだった。きっと、魚釣りの人は幻の魚を見つけてもその時傍に誰もいなかったら満たされないんじゃないかな。それよりも、奥さんや娘さんと過ごした方がずっと幸せな気がする。ワンピースのお姉さんも、この先何着もの服を手に入れても果てがなくて、永遠に満たされないんだろうな。他の人たちも多分同じだと思う。それでも、一緒に笑ったり泣いたりできる仲間がいたらそれだけで幸せになれるん

じゃないかな。そう思いながら僕は彼女のための歌を続けた。その時、夜空に幾本もの流れ星が降り、僕の足元には輝く一輪の花が咲いていた。
「これが、魔法の花……。どうしよう、本番前なのに。こんなのって反則だよね。」
「そんなことないよ。君の思いが星に通じた証だよ！」
「ありがとう。」
「この花で一緒に月まで行こうよ！」
「ごめん、月には行かずに元いた世界に帰るって決めたんだ。」
「そうなの？帰ってもいじめられる日々に戻るだけなのに良いの？」
「うん。やっぱりちゃんと逃げずに向き合おうって思ったんだ。」
「……そっか。それじゃあ、その花を使って帰るんだね。よーし、勇気をもらったから今度は私が頑張って歌うよ！」
　僕は首を横に振った。
「この花は君に幸せになってほしいっていう僕の願いから生まれたものだ。だから、きっと君のためにしか使えないよ。これは君が使って。」
「でも、そしたら君はどうやって……。」
　そう言う彼女に僕は笑いかけた。
「ありがとう、僕は君のお陰で本当に失ってたものを取り戻したよ。」
「？」
「今まで僕が歌手になりたかったのは純粋に歌が好きだったのもあるけど、それ以上に僕の歌を皆が褒めてくれたからな気がする。でも今は、誰かと一緒に誰かのための歌を届けたいなって思ったんだ。だからもう大丈夫だよ。」
　僕は花をそっと彼女に差し出す。
「君がこれからもずっと……。」
「だめ！」
　彼女が突然叫んだ。
「皆を幸せにしたいって君の思いは素敵だし、私も同じ思いだよ。でも、周りが幸せになったらそれで良いの？やっぱりそこには君自身も含めないとだよ！」
　その言葉に僕ははっとした。
「それじゃあ、こうしよう。僕と君がこれからもずっと幸せでいて、それぞれがそれぞれの場所で自分の夢をかなえられますように！」
　ほどなくして月へと行く汽車がやってきた。そして彼女を乗せて天高く昇って行った。僕はそれを見送った後、もと来た道を通り、元の世界に戻って急いで祖母の家へと帰ったが、不思議と数時間しか経っていないようだった。
　あれから何度か神社に行ったが、あの日の道はどこにも見当たらなかった。不思議な世界で数日を過ごした経験は、夢だったのかも知れないが、僕にはどうも本当のことに感じられた。どちらにせよ、今の僕は気の合う仲間と共に音楽に勤しむ日々を送っている。これから

先もずっと皆と幸せであれることを願って空を見上げた。